

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-10

横田には二度の離婚歴があったが、子供はいなかった。

横田に関する風聞は、あちこちから漏れ伝わってきたが、真紀の経験値が中和剤となって痴話喧嘩はあらかた回避された。ともあれ真紀は、ロシアの文豪が書いた『可愛い女』のような女なのだ。

裸婦像の話は睦言を交わしている最中に具象化された。

初対面で「貴女を描いてみたい」と直言された時には思いもよらなかった、ヌードになることを、真紀は今、何のてらいもなく受け入れることができた。

房事の前戯に日本画筆で遊ぶ性的嗜好が横田にはあった。画筆をセックスプレイに使うことは、彼に限らず、画業を生業とする者の中には少なからず存在するのかもしれない。横田は中二階のプライベートエリアで飛騨高山産の和ろうそくを三本灯すと、真紀の肉体がより一層、光と陰影で際立つ様に時間をかけて三台の燭台を配置した。

ベッドに横たわる真紀は、芸術家然としていないで、むしろ商社マンと言ったほうが似つかわしい横田の風貌を視界に収めつつ「可笑しな人……」ギャップの振幅を面白がる余裕が生まれていた。

横田は絵具や墨のボカシに使う唐刷毛を真紀の裸体に這わせながら、「貴女のプルンとしたお尻、腰の括れ、桃のような乳房、スレンダーな太股……、みんな肉体のキャンパスに溶かし込んでいこうよ」と小鼻を膨らませ、ろうそくの明かりに揺らぐ真紀の姿態を凝視しつつナルシスト気味に囁き、自己高揚バイアスをかける。

横田の習性に多少の寒々しさを覚えた真紀の心証を、男は画業の名声を博するだけの筆遣いで女の各々の肉体の稜線を絶妙なタッチで際立たせたかと思えば、絶頂寸前でぼかしていく美の極致に対する集中力は、均衡と落差が拮抗して起こすエネルギーを循環させることで一変させた。

寝物語が非日常的であればあるほど忘我の境に深入りする真紀の様相が横田の視聴覚を刺激し肥大化させた。

最高峰の唐刷毛と選ばれし画家が織りなすエロスは、鳥居清長の春画に肉薄する美体感を連想させた。かつて真紀がオーラル・セックスで味わったオーガズムとは異世界への扉であった。